

# ヴィクトル・ユゴーとテオフィル・ゴーチエ

## —— 文 学 史 の 裏 面 ——

(2002年10月8日、九州日仏学館)

桑 原 隆 行

(付 フランス語訳：Stéphane CLAIR)

ぼくは福岡大学でフランス語を教えています。フランス語学科の学生を対象にした授業では、フランス文学やフランス映画のシナリオをテキストに使います。仕事柄、普段フランス文学の作品は色々読むわけですが、特に興味があり好きで読んでいるのは、テオフィル・ゴーチエ Théophile Gautier、ジョルジュ・サンド George Sand、ピエール・ロチ Pierre Loti などの作品です。福岡大学と城南市民センターが共催している市民ゼミナールで、先月、三回に亘りこの三人の作家たちの恋愛模様を話したばかりです。

もちろん、専門的な読書ばかりをしているわけではありません。秘かに告白しますと、実はフランスのゴシップ雑誌を定期購読しています。ですから、ぼくが覗き見たスターたちの暴かれた生態、<sup>あばか</sup>行 状をネタにお喋りできれば一番いいのですが、そういうわけにもいきません。残念です。せめて、今日のユゴー Hugo とゴーチエに関するお話しを、ゴシップ風の話から始めることにしましょう。

週刊誌の見出し風に言うと、「ユゴー、友人の娘と密会」、「老いを知らない詩の巨人ユゴーの欲望、マンドス夫人をも捉える」というような表現になります。ゴーチエには、詩人のカチュル・マンドス Catulle Mendès と結婚したジュディット Judith という娘がいました。ユゴーは、この友人の娘、年齢差が四十三あったジュディットと性関係を結ぶのです。情事の始まりは1870年代の前半のことでした。

一見スキャンダラスな関係に見えますが、恐らくユゴーにはスキャンダルの意識はなかったでしょう。モーパッサン Maupassant の『ベラミ』 *Bel-Ami* という小説を読んだことがおありでしょうか。あの中に妻が浮気している現場に、ベラミが警察と一緒に踏み込む場面があります。ユゴーも同じように（とはいっても逆の立場ですけど）相手の夫に現場を見つかり、訴えられる事件を経験しています。

エピソードを一つ紹介しておきます。ユゴーの有名なこの事件を明らかにモデルに使っているモーパッサンの『ベラミ』は、出版時にまたもユゴーとの奇妙な因縁で結ばれました。『ベラミ』が発売されたのは1885年ですけれど、ちょうど同じ年にユゴーが死亡した（5月22日）ころと時期が重なり、その煽りを受けて余り話題にのぼることもなく、売れ行きも最初低調だったからです。（参照。Henri Troyat, *Maupassant*, Flammarion, 1989.）

情事の部屋を急襲されたこの事件を機に、ユゴーの女癖が治るかということ、そうはならないのです。性に関して、ユゴーは懲りない人間であり、躊躇や抑制や道徳心とは無縁でした。彼は女性に関しては少しでも魅力的で、欲望を刺激するところがあれば見境なしに性的対象にできる、こういう言い方が許されるなら度量の広い人間でした。

世間には全身が不細工のかたまりで、100%醜い女性は稀でしょうから、機会と偶然さえあればどの女性でも大詩人のベッドに誘われていた可能性があります。詩の巨人は性の巨人でもあったのです。鹿島茂さんは、ユゴーを「性の蒸気機関車」と形容しています。（参照。鹿島茂『パリの王様たち』、文藝春秋、1995年。）ユゴーにとって、ジュディット・ゴーチエも性の燃焼炉に取り込む燃料、エネルギー源の一つに過ぎなかったのかもしれない。

さて、「ユゴーとゴーチエ」と名付けた今日のお話ですけれど、方法というほど大袈裟なものではありませんが、立場をはっきりさせておきます。つまり、交際のあったゴーチエの側の視点を援用して、19世紀の大詩人ユゴーを見ていきます。ユゴーの私生活の一部、文学史の裏、裏面を少し紹介できたらいいなと考えています。

1830年の、ユゴーの芝居『エルナニ』上演。今や、文学史上の伝説とも化している、その時の赤チョッキを着たゴーチエの獅子奮迅の働き。その頃から、二人は知り合いではあったのですが、より親密な付き合いが始まるのは1832年からです。当時、ゴーチエ一家はロワイヤル Royale 広場（現在のヴォージュ Vosges 広場です）の8番地に住んでおりました。同じ広場の6番地にユゴー一家が引っ越してきて、言わば、ご近所付き合いが始まるのです。

その家の歓迎される客になり、頻繁に招待されるには、その家の女主人・夫人に気に入られることが肝心です。この法則が活かされて、ゴーチエはユゴー家の喜ばれる招待客になります。ユゴー夫人アデル Adèle に気に入られ、テオ（ゴーチエはテオフィルという名前ですから、略してテオです）と呼ばれて、可愛がってもらえたのでした。

脇道に逸れますけれど、美しいマダムに好かれるゴーチエが羨ましいです。ぼくはゴーチエとは違い、魅力的な女性ではなくて、妙に動物には好かれるのです。パリのサン＝ジェルマン＝デ＝ブ

レ界隈の裏手の通りにあった（名前は忘れましたが）アクセサリー屋さんの大型犬マックスも、ぼくを好いてくれました。でも、彼は誰にでも、特に女性には愛想の良い優しい犬で、女性の手でお腹を撫でてもらうのが大好きな様子でした。至福の余り、うとうとし始めるのです。

さて、話を元に戻します。毎週日曜日の夜が招待になり、ユゴー家の食卓にはゴーチエの食器が用意されるというのが恒例になるのです。ゴーチエに宛てたユゴー夫人アデルの手紙を引用します。「拝啓。ショコラを召し上がりに来ないなんて本当に悪い人。あなたのために用意され、毎週日曜日にあなたを待っているショコラなのに、いつも冷めてしまうのです。」また、別の手紙では、こんな調子です。「夕食にいらしてください。あなたのご好意に感謝し、あなたにわたくしの心からの友愛の気持ちを新たにしたいので。」

敬愛し憧れ見ていた詩人の王ユゴー。このユゴー夫妻に可愛がられ、日曜日毎の夕食への招待という特別の厚意を受けて、ゴーチエは嬉しく思っていたのは確かです。しかし、単純に喜べない訳がありました。アンヌ・ユベルスフェルド Anne Ubersfeld さんという人が『テオフィル・ゴーチエ』という本 (Stock, 1992) の中で書いていることを引用すれば、説明がつきます。「ところで、ユゴー家はあまり食べない人たちで、ご馳走はめったに出ない。大食漢のゴーチエはおそらく、師匠に会える喜びと胃袋の痙攣とに捉えられていたはずだ。」

ゴーチエは、美味しい料理とワインを大量に流し込まないと不機嫌になるガルガンチュアのような大食漢でした。ゴーチエは1862年に万博取材でロンドンに渡った時も、出されるホテルの食事が少量すぎて不満を漏らしています。娘ジュディットの報告によれば、我慢できなくなって買い込んできた食料の山は驚くほどの量と種類です。海老、サーモン・マリネ、ヨーク・ハム、羊舌、スモーク・ビーフ、スティルトン・チーズ、チェスター・チーズ、大黃タルト、プラムケーキ、ダンディー・マスタード、黒ビール、ペイル・エール、ポート・ワイン。

大食漢の正直な胃袋は、ユゴー家の食卓で待つ小鳥のエサのような僅かな食事に失望を隠せないのです。逆の例を挙げましょう。1863年にノアン Nohant のジョルジュ・サンドの館に滞在した時、ゴーチエの胃袋はふんだんに供される大量の色とりどりの美味しい料理の数々に狂喜・感激しました。

ユゴー家の食卓の質素なメニューから、ぼくらはユゴーの小食、節約家で締り屋の面を知ることができます。ユゴーは金銭管理が本当に細かい人でした。恋人ジュリエット・ドゥルエ Juliette Drouet さんへの月々のお手当てもぎりぎりの所までしか渡さずに、使い道を細かに記入しておくように要求していました。

ユゴーが金銭面で自分に課す抑制が大きければ大きいだけ、性的欲望は抑制を失い増大・亢進していったみたいです。お金を消費するのは渋る一方で、性エネルギーを消費することには奔放・食欲だったのです。

ゴーチエはユゴー家のために、芝居のチケットをプレゼントすることが何度となくありました。演劇批評を担当するゴーチエは、チケットが自由に手に入る特権的な立場にあったからです。また、アデル・ユゴーの手紙を引用します。

「わたくしのボックス席の座席券を二枚同封しました。今夜行きます。妹さんとご一緒のあなたにお会いするのを楽しみにしています。」このように逆に、ユゴー夫人の方が芝居のチケットを融通してあげることもありました。ユゴーとゴーチエが家族ぐるみで親しく付き合っている様子が分かります。

ゴーチエが演劇批評を担当していたと言いました。ここでしっかり認め、指摘しておかなくてはならないのは、ゴーチエが19世紀の演劇批評を一つの芸術にまで高め、ジャンルとして確立した人物であることです。彼の演劇批評は、まるで、一編の物語を読んだような印象を残してくれます。長所と面白さの的確で犀利な分析と、自由闊達で踊るような文章。

読者があたかも自分が劇場でその芝居を実際に見たような気になるほど、ゴーチエの描写の才能は冴えていて、芝居の場面を彷彿とさせるのです。ジョルジュ・サンドもゴーチエの演劇批評の大ファンでした。わざわざパリに自分の芝居を観に行くよりも、後でゴーチエのその芝居評を読む方が楽しめる、と書いています。

ゴーチエの生彩に富む優れた劇評に一番助けられ、恩恵を受けたのは、ユゴーです。最初の『エルナニ』*Hernani* の時から『マリオン・ドロルム』*Marion Delorme*、『王は楽しむ』*Le Roi s'amuse*、『ルクレチア・ボルジア』*Lucrece Borgia*、そして『リュイ・ブラス』*Ruy Blas* や『ビュルグラヴ』*Burgaraves* の時まで。どんなにユゴーの芝居が酷評を浴びることがあっても、ゴーチエだけは王に忠実な臣下（この王と臣下の譬えはゴーチエ自身が使っている表現です）のように、最後までユゴーの芝居を擁護し賛美し続けるのです。

ユゴーは臣下の忠誠をいいことに、自分のお気に入りの女優を賛美して売り込む記事を書いてくれと、ゴーチエに依頼したりもしています。逆に、それはユゴーがゴーチエの批評の確かさと才能、対象を印象深く鮮やかに描き出す文章力を信頼していたからでもあります。

ゴーチエはもちろん、ユゴー劇の主演女優だったラシェル嬢 *Mademoiselle Rachel* やドルヴァ

ル夫人 Madame Dorval に関する記事を書いています。でも、ここで一番紹介しなくてはならないのは、ゴーチエによる女優ジュリエット・ドゥルエ Juliette Drout 評です。ジュリエットさんが後に女優を止めて、生涯ユゴーの愛人の立場を選択することになるだけに余計に、その評価に興味を引かれます。

その記事は、『ルクレチア・ボルジア』の中でイタリアの王女役を演じたジュリエット嬢について書かれたものです。その中で、ゴーチエは肖像画家のようにジュリエットさんの顔の調和のとれた美しさを、精妙に描いています。そして、彫刻家のように彼女の肉体の魅力を余すところ無く伝えています。引用します。「ジュリエット嬢の顔は端正で優雅に美しいので、悲劇の痙攣よりも喜劇の微笑みにより適している。鼻は整っていて、輪郭が鮮明でくっきりとしている。目はダイヤモンドのように輝き、澄みきっている・・・」

記事が書かれた1837年当時、ユゴーとジュリエットの関係はほとんど、公然の秘密 un secret de Polichinelle になっていました。ゴーチエの記事で、ユゴーは自分の恋人の美しさを新たに認識して、彼の男の虚栄心は美しい女を所有している満足を堪能したに違いありません。ゴーチエ自身、彼が恋情を寄せる踊り子のカルロッタ・グリズィ Carlotta Grisi の肉体を文章で賛美して飽きることがありませんでしたから、ユゴーの心理は分かりすぎるほどに分かったのです。

ユゴーのような詩の王を前にしたら、ほとんどの臣下は己の詩的才能の限界を知らされます。彼らが活路を見いだすとすれば、王とは違う道、異なる分野においてということになります。そういう意味で、ゴーチエが散文の方で才能を発揮させていったのは賢い選択でした。

幻想小説、『カピテヌ・フラカス』 *Le Capitaine Fracasse* のような心躍る活劇小説、『スペイン紀行』 *Voyage en Espagne* を始めとする魅力的な旅行記の数々が彼の颯爽・華麗で自在な文章で書かれることになったからです。逆に、ロマン主義の偉大な王ユゴーは、周辺の多くの臣下たちの様々な才能をそれと知らずに開花させることになった、という言い方もできるでしょう。

締めくくりの時間が近づいてきました。1870年代のゴーチエは健康が衰え、病気がちで、経済的にも困窮した状態に置かれます。父親の体を気遣う娘ジュディットは、金銭的不如意に心傷め、止むを得ず王ユゴーの所に援助を懇願しに行きます。

ユゴーは役所に働きかけて、ゴーチエへの三千フランの年金支給を実行させます。感謝の言葉を述べにきたジュディットに、ユゴーは恩着せがましく、密会を要求します。逢ひ引きの日、ホテルの部屋で待つユゴーの耳に約束の時間に少しだけ遅れて、秘かなノックの音が聞こえました。

さて、最後に宣伝させていただくと、ユゴーとジュディット・ゴーチエの話もゴシップ雑誌の話も、『フェティシズムの箱』（大学教育出版）というぼくの本に面白く書いてあります。自画自賛ですが、これは素敵な本なのです。内容や目次や装丁や紙の匂いなど、何か一つでも気に入りそうなら、購入して読んでいただけると嬉しいです。この後カクテル・パーティが用意されていると聞きました。恐らくぼくの胃袋はゴーチエとは違い控え目にできているはずです。ノーマルな量で満足できるぼくらの平均的な胃袋に気持ち良くなってもらいましょう。今日は、お話を聴いていただいて、どうもありがとうございました。

※2002年11月8日、九州日仏学館において、ヴィクトル・ユゴー生誕200年記念の講演会が開催された。

上記の文章は、その時の原稿をそのまま掲載したものである。講演会の中では、思いつきで急遽、桑原が一人で日本語とフランス語を段落ごとに交互に読むスタイルを採用した。今、省みて面白い試みだったと自賛しているのだけれど、聴衆の方々もそう感じて楽しんでもくれたとすれば嬉しい。素敵なフランス語訳を用意してくれた、大分日仏学館のステファン・クレールさんに心から感謝申し上げます。